

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四糸金吾殿御返事

しきょうなんじ こと

（此経難持の事）

新版
1544
〜
1545

しじようきんごどのごへんじ しきようなんじ こと
四糸金吾殿御返事（此経難持の事）

ぶんえい ねん がつ にち さい しじようきんご
文永12年（'75）3月6日 54歳 四糸金吾

しきようなんじ きよう たも がた
「此経難持（この経は持ち難し）」のこと。

べんのあじやり もう そうろう きへん 語 たも よう
そもそも弁阿闍梨が申し候は、貴辺のかたらせ給う様

たも もの げんぜあんのん ごしようぜんしよ うけたまわ
に、「持つらん者は、『現世安穩、後生善処』と承つて、

こぞ こんにち 型 しんじん もう
すでに去年より今日まで、かたのごとく信心をいたし申し

そうろう だいなんあめ きた そうろう
候ところ、さにてはなくして、大難雨のごとく来り候」

うんぬん 真 そうろう べんこう 偽
と云々。まことにてや候らん、また弁公がいつわりにて

そうろう 序 ふしん 晴 たてまつ
候やらん。いかさま、よきついでに不審をはらし奉ら

ん。

ほけきよう もん なんしんなんげ と たも きよう

法華經の文に「難信難解」と説き給うはこれなり。この經

聞 受 ひと おお き う

をききうくる人は多し。まことに聞き受くるごとくに大難

きた おくじふもう ひと まれ

来れども憶持不忘の人は希なるなり。

う 易 たも 難 じようぶつ たも

受くるはやすく、持つはかたし。さるあいだ、成仏は持

きよう たも ひと なん あ こころえ たも

つにあり。この經を持たん人は難に値うべしと心得て持つ

すなわ と むじよう ぶつどう え うたが

なり。「則ちこれ疾く無上の仏道を得ん」は疑いなし。

さんぜ しょぶつ だいじ なんみようほうれんげきよう ねん たも

三世の諸仏の大事たる南無妙法蓮華經を念ずるを持つと

い きよう い ほつけ ぞく ごじ

は云うなり。經に云わく「仏の囑するところを護持せん」

といえり。天台大師云わく「信力の故に受け、念力の故に持

うんぬん

い

きよう

たも

がた

つ」云々。また云わく「この経は持ち難し。もししばらく

たも

われ

すなわ

かんぎ

しよぶつ

うんぬん

も持たば、我は即ち歓喜す。諸仏もまたしかなり」云々。

ひ

薪

くわ

とき

盛

おおかげふ

ぐら

火にたきぎを加うる時はさかなり。大風吹けば求羅は

ばいぞう

まつ

まんねん

齡

たも

ゆえ

えだ

曲

倍增するなり。松は万年のよわいを持つ故に枝をまげらる。

ほけきよう

ぎようじや

ひ

ぐら

たきぎ

かぜ

だいなん

法華經の行者は火と求羅とのごとし。薪と風とは大難の

ほけきよう

ぎようじや

くおんちようじゆ

によらい

しゆぎよう

えだ

ごとし。法華經の行者は久遠長寿の如来なり。修行の枝

うたが

をきられ、まげられんこと、疑いなるべし。これより後

しきようなんじ

しじ

ざんじ

あん

たも

のち

は、「此經難持」の四字を暫時もわすれず案じ給うべし。

きようきようきんげん

恐々謹言。

ぶんえいじゆうにねんきといさんがつむいか

文永十二年乙亥三月六日

しじようきんごどの

四条金吾殿

にちれん

日蓮

かおう

花押